

銭形平次捕物控

朱塗の筐

野村胡堂



「親分、美しい新造しんぞうが是非逢わしてくれって、来ましたぜ」

とガラツ八の八五郎、薄寒い縁にしゃがんで、柄にもなく、お月様の出などを眺めている銭形の平次に声を掛けました。

平次はこの時三十になったばかり、江戸中に響いた捕物の名人ですが、女の一人客が訪ねて来るのは、少し擦くすくったくみえるような好い男でもあったのです。

「なんて顔をするんだ。——どなただか、名前を訊いたか」
「それが言わねえ」

「何？」

「親分にお目にかかって申上げますって、——滅法美しい女だ

ぜ、親分」

「女が美よくつたつて、名前もおつしやらない方にお目にかかるわけには参りません、と言つて断つて来い」

平次は少し中つ腹だつたでしょう。名前も言わない美しい女と聞くと、妙に頑固かたくななことを言つて、ガラツ八を追つ払おうとしました。

「悪者に追つかけられたとか言つて、蒼あおい顔をしていますよ、親分——」

「馬鹿ツ、何だつて冒頭はなつからそう言わないんだ」

平次はガラツ八を掻き退けるように、入口へ飛出して見ました。格子戸の中、灯あかりから遠い土間に立ったのは、二十三——四の年増、ガラツ八が言うほどの美しい縹きりょう織ではありませんが、身形みなりも顔もよく整つた、確しつり者らしい奉公人風の女です。

「お前さんか、あつしに逢いたいというのは？」

「あ、親分さん、私は悪者に跟つけられています。どうしましよ
う」

「ここへ来さえすれば、心配することはない。後ろを締めて
入んなさるがいい」

ただならぬ様子を見て、平次は女を導き入れました。奥の
一間——といっても狭い家、行灯あんどんを一つ点つけると、家中の用
が足りそうです。

「親分さん、聞いている者はありませんか」

「大丈夫、こう見えても、御用聞の家は、いろいろ細工がし
てある。小さい声で話す分には、決して外へ洩もれる心配はな
い。——もつとも外に人間は二人居るが、お勝手で働いてい
るのは女房で、今取次に出たのは、子分の八五郎というもの

だ。少し調子つ外れだが、その代り内緒の話を外へ洩らすよ
うな気のきいた人間じゃねえ」

平次は砕けた調子でそう言つて、ひどく硬張こわばっている相手
の女の表情をほぐしてやろうとするのでした。

「では申上げますが、実は親分さん、私は銀町しろがねちょうの石井三右衛門
の奉公人、町まちと申す者でございませうが」

「えッ」

石井三右衛門といえ、諸大名方に出入りする御金御用達、
何万両という大身代を擁して、町人ながら苗字帯刀みょうじたいとうを許され
ている大商人です。

「主人の用事で、身にも命にも代え難い大事の品を預かり、仔
細あつて本郷妻恋坂ほんごうつまこいざかに別居していらつしやる若旦那のところ
へ届けるつもりで、そこまで参りますと、予かねてこの品を狙つ

ている者の姿を見掛けました。——いえ、逢つたに仔細はございませんが、——私の後を跟^つけて来たところを見ると、どんなことをしてもこの品を奪い取るつもりに相違^ごございませ
ん」

お町は、こう言いながら、抱えて来た風呂敷包を解きました。中から出て来たのは、少し古くなった桐^{きりまき}匣の箱で、その蓋^{ふた}を取ると、中に納めてあるのは、その頃^{みんじん}明人飛来一閑^{ひらいいっかん}という者が作り始めて、大変な流行になつて来た一閑張^{てぼこ}の手篋、もとより高価な物ですが、取出したのを見ると、虞美人草^{ぐびじんそう}のような見事な朱塗^{しゅぬり}、紫の高紐^{たかひも}を結んで、その上に、いちいち封印をした物々しい品です。

「フーム」

銭形の平次も、妙な圧迫感^{うな}に唸^{うな}るばかりでした。石井三右

衛門の使いというのが一通りでない上、朱塗の一閑張の手筐で、すっかり毒気を抜かれてしまったのでしよう。このお町とかいう確しかり者らしい年増の顔を、次の言葉を待つともなく眺めやるのでした。

「ちようど通り掛ったのは、お宅の前でございます。捕物の名人と言われながら、滅多に人を縛らないという義に勇む親分をお願いして、この急場を凌しのごうとしたのでございます。後先も見ずに飛込んで、何とも申し訳ございません」

お町は改めて、嗜たしなみの良い辞儀を一つしました。

「で、どうしようと言うのだえ、お町さんとやら」

「この様子では、とてもこの手筐を妻恋坂までは持つて参れません。そうかと言って、このまま引返すと、一晚経たないうちに、盗まれることは判り切っております。御迷惑でも親

分さん、ほんのしばらく、これを預かっておいて下さいませんでしうか」

「それは困るな、お町さん、そんな大事なものを預かって万一のことがあつては——」

平次も驚きました。命がけで持つて来たらしいこの手筐を、そんなに軽々しく預かつていいものかどうか、全く見当も付かなかつたのです。

「親分のところへ預かつておいて危ないものなら、どこへ置いても安心なところはございません。どうぞ、お願いでございます」

折入つての頼み、平次もこの上は没義道もぎどうに突つ放せそうもありません。

「それは預からないものでもないが、少しわけを話して貰お

うか。中に何が入ってるか見当も付かず、後でどんなことになるかもわからないようなことでは、どんなに暢気のんきな私あつしでも心細い」

「それでは、何もかも申上げましょう。親分さん、聞いて下さい、こういうわけでございます」

二

石井三右衛門というのは取つて六十八、配偶つれあいは五年前に亡くなりしましたが、たった一人の倅せがれ三之助さんのすけは、年寄りつ子の我儘わがまま育ちで、悪遊びから、とうとう勝負事にまで手を出すようになったり、金看板のやくざ者になって、三年前に久離きゆうり切つて

勘当され、二十五にもなるいい若い者が、妻恋坂の知り合いの二階に為すこともなくゴロゴロ暮しているのです。

銀町の店には、養い娘のお縫ぬいという十九になる女と、手代ともなく引取られている甥おいの世之次郎よのじろうとが、年寄りの世話を焼いておりますが、どちらも財産目当ての孝行らしくて、三右衛門の気には入りません。

大番頭は禄兵衛ろくべえといつて、名前の通りむつかしい四十男、これは三右衛門に代って店の支配をし、大勢の奉公人を取締つておりますが、正直一途で、金儲けや商売のことにかけては、鬼神きしんのような男ですが、家の中の取締りはあまりよく行き届きません。

三右衛門の力と頼むのは、十三の年から足かけ十二年奉公したお町ただ一人だけ、これは赤の他人ですが、それだけに、

財産に目をくれるでもなく、昔の人達にはよくあつた本当の主人思いで、半身不随で寝たきりの三右衛門を、自分の親のように世話をしていたのです。

身代は少なく積つても十万両。支配人任せで寝ている三右衛門は、力になる身寄りがないだけに、その始末が苦になつてなりません。自分の生きているうちは、どうやらこうやらやつて行けど、明日も知れぬ病身になつてみると、せつかく築き上げた大身代を、甥や養女や、赤の他人に、熊鷹くまたかに餌えさを奪われるように滅茶滅茶にされてしまうのが心外でたまらなかつたのです。

そうかといつて、今大急ぎで養子を迎えることもならず、いのち生命の灯が次第に燃え尽きるのがわかると、ともし勘当した倅が、つくづく恋しくなつたのも無理のないことでした。

しかし、一旦久離切った倅の三之助を、死際にこっちから呼び戻すというのも、昔むかし氣質かたぎの三右衛門には出来ず、番頭も甥も、出入りの者も気が付かないのか、気が付いても、わざと知らん顔をするのか、口を噤つぶんで、そのことには触れてくれませんから、病身の三右衛門には、どうすることも出来なかつたのでした。

我慢が出来なくなつて、呼寄せたのはお町。

「俺が目を瞑つぶれば、この身代は滅茶滅茶だ。他人に筆むしり取られてしまふくらいなら、——これは内緒の話だが——やくざ、でも血を分けた倅に費つかわれた方が、どんなにいい心持だか知れはしない。俺に万一のことがあつたら、用筆筒ようだんすの中の朱塗しゅぬりの手筐てばしを、中味なまごとそつと妻恋坂の倅へ届けてくれ。その中には諸大名を始め、江戸中の大商人に貸した金の証文が一杯

入っている。どんなに下手に現金を掻き集めても、五万両や三万両にはなるはずだ。店の有金は、禄兵衛始め奉公人達にくれてやってしまい、土地と家作は、娘と甥に半分ずつやるように、これは別に、遺言状を書いておく」

こう言い含めたのは、ツイ三日前、その翌る日は三右衛門、二度目の中風ちゅうふうふうに当って、正気を失ったまま、昏々こんこんと睡ねむつてばかりいるのです。

こうなると、家の中にはもう、前々から孕はらんでいた財産争いが具体的になって、明日をも知れぬ重病人を抛ほうつておいて、現金や貸金の勘定に夢中になる有様、朱塗の手篋の証文も、いつ誰に見付けられて、奪い去られてしまうものか、全く油断すきも隙すきありません。

お町はこう言いながら、もう一度手篋を平次の方へ押しや

りました。

「そんなわけで、今晚という今晚、甥の世之次郎様が、旦那様の枕許の用筆筒へ手を掛けなすつたので、たまり兼ねて持ち出しました。旦那様は二度目の中風でございませうから、お癒なほりになるものやら癒らぬものやらわかりませんが、道々考え直してみると、まだ亡くなつたわけでもないのに、あわててこの手篋を持ち出したのは、少し早すぎたのかもわかりません。——若旦那の三之助様は、それはそれは荒っぽい方でございますから、証文をどうかしてしまつた頃、旦那様が正かえ気に還かえつたりしては、私の申し訳も立ちません。そうかと申して、外にお願いするような身寄りもなし、ここへ飛込んだのを御縁に、どうぞしばらくこれをお預かり下さいませんか」

平次もしばらくは言葉もありません。

大抵のことには驚かないように訓練を積んでいますが、夢にも見たことのない五万両三万両という大金の証文を、こんな浅まな家に預かることを考えると、さすがに穏やかな気持ではいられなかつたのです。

「驚いたな、お町さん、私もいろいろの目に逢つたが、石井三右衛門ともいわれる大金持の身上しんしやうを、まるごと預かるようなことになろうとは思わなかつたよ」

「それが、親分さんの信用でございます。あまり遅くなると店の方が面倒になりますから、これでお暇いとまいたします。それではどうぞ」

「まあ、どうも仕様があるまいが、お前さんはどうするつもりなんだい」

「私はこの桐の空筐だけ持って、妻恋坂へ参ります」

「危ないじゃないか、引っ返しなすつたらどうだい」

「いえ、若旦那の三之助様に親御のお心持も伝え、それに、中味は親分さんに預けてあることも申さなければなりません」

「なるほど」

「それから、私の後から跟^つけて来たのは、石井家の身上を狙う悪者に相違ありませんが、誰が本当の悪者なのか、私にもまだ見当は付いておりません。この空筐を^{おとり}囚^とにして、そいつの顔が見てやりとうございます」

恐ろしいいきかん、平次もさすがに、この男まさりの女の顔を眺めやるばかりでした。

「そいつは危ない。いくら宵のうちでも、間違いがあつたらどうするんだ。ゴロゴロしている野郎があるから、そこまで送らせよう」

「いえ、親分、そんなことをしたら、曲者は姿を隠してしま
います。私一人なら、馬鹿にしてこの筐を取る気にもなりま
しょう」

「そう言つたつて」

「こんなに見えても、私は思いの外力がございます。小男の
世之次郎さんなどには負けることじやございません。ホ、ホ、
ホ」

「そいつは豪儀だが——」

平次が心配するのも構わず、赤い手筐を置いたまま、お町
はいそいそと街の月の中へ飛出してしまいました。

「ガラツ八」

「へエ」

「聞いたか」

「聞きましたよ。驚いた女があるものですね」

「手筐を預かってみると、俺が飛出すわけにもいくまい。手前てめえ

すぐあの女の後を跟けて、御苦労だが妻恋坂まで見届けてくれ。途中でヘマをして、曲者にさと覚られるようなことをするな」

「大丈夫ですよ、親分。このお月様だ、相手の女が、五六町離れて行つたつて匂いでも解りまさア」

「いやな野郎だな」

「ヘツ、ヘツ」

ガラツ八は草履を突っかけると、それでもそ、そ、く、さ、とお町の後を追いました。明神様の方へ——。

「親分、た、大変」

「何が大変なんだ、騒々しい」

飛んで来たガラツ八。格子戸へ一ぺん鉢合せをしてハネ返されて、それからまた開けて、バアと顔を出しました。

「落着いていちゃいけねえ、すぐ来て下さい」

「どうしたんだよ」

朱塗の手筐は、早くも仕舞い込んだ平次、十手を懐へネジ込むと、裾をつまんで、サツと外へ出ます。まことに慣れた手順で、一分一厘の隙もありません。

「あの女が殺されたんだ」

「何？」

「明神様の裏の闇へ入ると、妙な物音がしたつきり、一向出る様子はねえ。駆け付けてみると、喉笛のどぶえを切られて、血だらけになってブツ倒れているだろうじゃないか」

「箱は？」

「奪とられてしまったらしいよ、親分」

「曲者は？」

「まるで見当が付かねえ。二三十間遅けんれて行ったあつしが、駆け付けると右の通りだ。逃げる間も何にもねえはずだが、犬っころ一匹飛出さないから不思議だろう」

「手前が間抜けなんだよ、急いで行けッ」

「息が切れてかなわねえ」

「死体はそのままにしておいたのか」

駆けながらも平次は、出来るだけガラツ八の口から要領を引出して、事情の外形アウトラインをはつきりさせようとする様子です。

「通りかかった町内の人に頼んで来たよ」

「町内の人とは、どうして判った」

「懐手ふところをして立って見ているんだもの、町内の人だろう」

「……………」

現場へ行ってみると、もう五六人の人が立って、騒いでおります。木立と建物の蔭で、月の光もここまでは届きませんが、近所から持出したものと見えて、提灯ちようちんが二つ、街の土にのけぞ仰反つて、血の海の中にこと切れているお町の死体を、気味悪そうに覗いております。

「御町内の方、掛り合いでお気の毒だが、しばらく動かずにいて下さい」

平次はそう言いながら、提灯を借りて、お町の死体を見入りました。後ろから喉笛を切った時、下手人の顔を見るつもりで少し顔を反そらしたらしく、傷は少し左へ外それておりますが、そのために頸動脈けいどうみやくを切られて、ひとたまりもなく死んでしまった様子です。

あおむ仰向けに倒れているところを見ると、たぶん手筐を奪い取るために引倒したのでしよう、お町の手は、それでも見覚えの空風呂敷を韃ひしと掴つかんでおりますが、中の桐箱はその辺には見当りません。

——中を開けたら、曲者もさぞ驚いたろう——平次はツイそんな気持になりましたが、そのまま提灯を上げて、死体を取囲んだ五六人の顔を順々に照らして行きました。

「へエ」

「この中に、お前が最初に、死骸の番を頼んだ人がいるか」

「親分、いませんよ」

「本当か」

「本当ですとも、小作りで、——暗くて解らなかつたが猫背の男でしたよ、どうも不思議だ」

「何が不思議なものか、それが下手人だったのよ」

「えッ」

「馬鹿だな、相変らず、——お前は先刻さつき、二三十間駆け付けるまでここから逃げ出した者はないと言つたらう」

「へエ——」

「外に隠れる場所はねえ。急場の思い付きだ、たぶん一度隠れたその扉の間から、暢気のんきそうに懐手をしてノソリと出て来

たろう」

「そうですよ、親分。まるで見ていたようだ」

「町内の人のような顔をして逃げたんだ。恐ろしく落着いた野郎だ。年恰好、人相、着物などを見なかつたか」

「それが親分、下手人と解れば見ておいたんだが——」

「仕様のねえ野郎だな」

「でも、猫背とわかっているんだから、これはわけもなく見付かるぜ」

「フーム」

「ね、親分、石井一家のうちから猫背を探しやアわけはねえ、行って当ってみましようか」

ガラツ八はすっかり得意になりました。本当に飛出しそうにするのを、

「いよいよ馬鹿だな、女から奪った箱はどこへやったか、お前にも見当は付くだろう」

「その辺の藪やぶへでも捨てはしませんか、どうせ、空っぽと解れば」

「空っぽだって、箱に仕掛けがあるかも知れないだろう、人まで害あやめて奪った物を、そう易々と捨てるものか」

「すると」

「お前が駆け付けるまでに、背中へ背負しよったんだよ」

「えッ」

「とんだ猫背さ。行って聞いてみるがいい、銀町にはそんな者は一人もないに相違ないから。——町内の人みんなスラリとしているぜ」

「へエ——」

平次の明察、たなこころ掌を指すようなのを聞いて、驚いたのは立会
いの衆でした。

「銭形の親分だぜ」

「そうだろう、それでもなくちゃ——」

と言ったやんぱ囁きを聞くと、

「皆さん、どうか、お引取り下さい。とんだ御迷惑でした。そ
れから町役人にそう言つて、ここへ来るようにことづけ言伝をお願い
します」

平次はもう野次馬を追つ払います。

「さア、こんな所に立っていると掛り合いになるぞ、帰れ帰
れ」

ガラツ八は急に強くなります。

しばらく、ちようちん提灯の灯で、あかりその辺を探していた平次は、やが

て道の上から剃刀をかみそり一挺拾い上げました。

「親分、好いいものが手に入ったネ」

「フム、あまり好よすぎるよ」

かなり使い込んだ剃刀、柄えをかんぜより観世縵で巻いて、生洩きしぶを塗つてありますから、ひどく特色のあるものですが、不思議なことに、大して血が付いてはおりません。

「親分、何を考えていなさるんだ」

「可怪おかしなことがあるよ、新しい齒こぼれのあるところを見ると、剃刀で切ったには相違ないが、一度血を拭いて、仕舞い込んで、また落したのはどういうわけだ。——余程あわてたのかな」

「……………」

「箱を背中へ入れて、お前をかついだ様子じゃ、下手人はよ

ほど胆のすわっている男らしいが——」

平次はいつまでも剃刀を睨にらんで頸くびを捻ひねっておりすが、さすがにこの謎は解けそうもありません。そのうちに、急を聞いて、町役人が、一隊の野次馬と一緒にやって来ました。

四

石井三右衛門の邸やしきは、大変な騒さわぎになりましたが、まだ、正気付いたばかりで、二人の医者が詰め切りで様子を見ている主人あるじの三右衛門には聞きかせるわけにいきません。

その中うちに銭形の平次は、疾風迅雷しつぷうじんらいのごとく、仕事を運びました。その晩、第一番に逢ったのは、支配人の禄兵衛、月代さかやき

の光沢つやの良い働き盛りの男で、背は高い方、少し気むつかし
 そうです。その代り堅いのと正直なのが看板で、家中の者
 が一目も二目も置いておられます。

「銭形の親分、あの女が殺されては、さしむき主人の世話を
 焼く者がありません。幸い、少しずつ正氣付いて来るよう
 ですが、お町はどうした、なんて聞かれたら、返事のしようが
 ないだろうと、心配していますよ」

支配人らしい行届いた心配です。

「番頭さん、この下手人はどうも家の中の者らしい。御主人
 があの様子だから、多分、相続争いに絡んだことじゃありま
 せんか」

「へエ、——そんなことが」

禄兵衛も否定はしませんが、ひどく酸すっぱい顔をしており

ます。

「で、お町さんが殺されて、さしむきお困りなら、どうでしょう、あつし私の手から一人女を入れたいんだが」

「と言うと？——」

「そう言つちや済まないが、番頭さんはお店が忙しくて奥へは目が届かないだろうし、私も毎日来ているわけにもいきません。幸い、本所の御用聞で、石原いしはらの利助りすけ親分の娘のお品しなさん、これは出戻りだが、きりよう縹緞も才智も人並みすぐれて、こんなことには打って付けの女です。お町さんの代りに、ただの奉公人という触込みで七日でも十日でも、ここへ置いてやつちや下さいますまいか」

平次の頼みは尤もつともでした。こんな大家に起つた事件の解決を、外から、医者が脈を引くようにしていたんでは、いつに

なつて解決するかわかりそうもなかったのです。

「それは構いませんとも、早速連れて来て下さい。家の中に親分方の息のかかった方が居なされると、私達もどんなに心丈夫だかわかりません。なにぶんこの節は、嫌なことばかりありますんでね——いや、これは私の口から申上げることではない」

禄兵衛はフツと口を噤つぶみました。

「ところで番頭さん、この剃刀は、この家の品じゃありませんか」

平次は懐中から、キリキリと手拭てぬぐいに巻いた剃刀を取出し、禄兵衛の手へ渡してやりました。柄も刃もよく拭き込んであるので、もう血の痕あとなどは容易に見付かりません。

「へエ、——これは、見覚えがありますネ。誰のだっけ、何

しろ大勢のことですから、忘れてしまいましたが、柄にこんな器用な細工をする者は、たんとは居りません。ちよいと待つて下さい」

緑兵衛はそう言いながら、通りすがりの下女を呼び入れて、剃刀を鑑定させました。

「お嬢さんのだアよ、番頭さん。家中で一番よく切れる剃刀じゃねえか」

さがみなまり
相模訛の下女は、何の遠慮もなくそう言つて、アタフタとお勝手へ行つてしまいます。

「お嬢さんと言うと？——」

「亡くなつたお内儀かみさんの遠縁の者で、此家ここの養い娘ですよ」
「その娘さんに逢わせて頂きましようか」

五

平次は間もなく、養い娘のお縫の部屋に案内されました。

十九と聞きましたが、境遇のせいか、年よりはふけて、二十二三と言つても通るでしょう。少し陰気な感じですが、素晴らしい美人で、何となく藪蔭やぶかげに咲き誇っている月見草を思わせる娘でした。

「お嬢さん、御免下さい」

「……………」

お縫はなんと挨拶していいか、見当も付かない様子で黙礼しました。

「この剃刀はお嬢さんのでしょうね」

「え」

「お町が殺された場所にあつたんですが」

「えッ」

見る見るお縫の顔は真つ蒼になりました。唇からサツと血の気が失せると、眼を大きく見開いて、頬の肉が、いたましい痙攣けいれんを起します。

「しばらくお預かりしますよ、お嬢さん」

「……………」

「今晚、御飯が済んでから、どこかへ出かけませんか」と改めて平次。

「え、どこへも」

「奉公人達は、しばらくの間、お嬢さんを見掛けなかつたと言いますが、どこに居なすつたんです」

「ここに居りました」

「ここに？」

「え、私はどうかすると、半日ぐらい、誰にも逢わずにここに居ることがあります」

もうこれ以上は訊くこともなかつたでしょう。

「お邪魔でした。お嬢さん、お寝やすみなさいまし」

番頭の禄兵衛を顧みて、今度は店の方へ。

「ね、親分、あのお嬢さんは、人などを殺せるような人間じゃありません。剃刀はお嬢さんのでも、これは私が請合いますよ、誰かお嬢さんの剃刀を持出した奴があるのでしよう」

「さア」

平次はそれには肯定も否定も与えませんでした。

間もなく、番頭の部屋を借りて、呼び出して貰ったのは、主

人の甥の世之次郎。

「へエ、今晚は、御苦勞様で」

店で働いているだけに、如才じよさいのないことはお縫と反対で、敷居際に手を突いて、支配人と平次の顔を等分に見上げました。小作りで、年の頃二十五六、少し三白眼しろめですが、色の浅黒い、なかなかの男前、なんとなく軽捷けいしやうで抜け目のなさそうな人間です。

「世之次郎さんと言いましたね」

「へエ」

「御主人に万一のことがあると、総領が勘当されていなさるそうだから、お前さんが跡取りというわけかネ」

平次は妙に立ち入ったことをツケツケ言います。

「とんでもない、親分。そうでなくてさえ、世間の口がうる、

さくてかありません。そんなことはどうぞおつしやらないように願います」

「まあ、いいやな、お前さんは運がいいんで。それはそうと晩飯の後でどこへも出なさりはしまいいネ」

「今晚ですか？」

「お町が殺された刻限に、お前さんはどこに居なすつたか訊きたいんだ」

平次の舌は、恐ろしく辛辣しんらつです。

「へエ、——お町は戌刻いっつ（八時）少し前に殺されたって話ですから、その時分私は町内の銭湯へ行っていましたよ」

「銭湯？　此家ここでは風呂は立ちませんか」

と平次。

「ありますよ。雇人が入るんで、毎晩立ちますが、私は瘡性かんしょう

で、流しの広い、上がり湯のふんだんにある銭湯でないと、入ったような気がしません」

「なるほど」

「私が内風呂へ入らないのは、家中の者が皆んな知っております」

「それにしても、宵から銭湯は、遠慮がなさすぎはしませんか」

「へエ」

主人の甥というにしても、店の者としては少し我儘わがままが過ぎるようです。

「何刻なんどきぐらい入っていましたかい」

「一刻（二時間）とも入りはしません」

「そんな長湯ですか、お前さんは？」

「へッ、少し稽古事をしているもんで」

「なるほど」

小唄の師匠へ行つて、一刻も変な声を出して唸^{うな}つて、帰りには手拭を濡^ぬらして、銭湯へ行つたような顔をするというのは、その頃の大商人の奉公人にはよくあることでした。

これは銭湯と、町内の稽古所を調べさえすれば判ると思つたのでしよう。平次はそれつきりにして、あとは店中の奉公人、一人一人に逢つてみました。が、さて、何の手掛りもありません。

六

平次と一時張合つて、近頃はすっかり折れてしまった本所の御用聞、石原の利助の娘、お品——まだ二十二で、平次の女房のお静とは仲好しの美しいお品——は翌る日、支配人禄兵衛の手で、石井家へ入り込みました。

表向きは殺されたお町の代り、病人の世話をするという名義ですが、実は、お縫や世之次郎をはじめ、雇人全部を見張るため、お品の骨折りも一通りではありません。

主人三右衛門は、幸い翌る日あたりから、少しずつ意識を恢復かいふくして、お品が行つてから三日目には、お町の居ないのを不思議そうに物問いたげな顔をすることもありました。

朱塗しゆぬりの筐はこは、騒さわぎが一段落済むまで平次が預かり、親の三右衛門がお町に大事を託した心持をくんで、勘当された倅せがれの三之助を石井家へ入れてやろうとしましたが、これは番頭の

禄兵衛が強硬に反対して、沙汰止みになりました。

三之助は無法者で、飲む買う打つの三道楽の外に、親の金を持出して、やくざな仲間にやるのを楽しみにしたくらいの人間ですから、——親旦那の思召しはさることながら、この家に入れたら、どんなことをするかもわからないと、禄兵衛は言うのです。それに、相続争いが、深刻になつていゝから、お縫や世之次郎と血で血を洗うような三つ巴みどもえの醜い争いが始まるに相違ない、かたがた三之助を呼び戻すのは、もう少し待つて貰いたいと言う言葉にも理窟があります。

平次も、しばらくその意見に任せて、成行きを見ました。が、お町を殺した下手人はどうしても判らず、桐の空箱の行方もそれつきりわかりません。

三日目に、番頭の禄兵衛は、店で紙入を紛失しました。縫

いつぶしの見事なものでしたが、中には幾らも入っていないから、騒ぐまでもあるまいと、自分の胸に畳んでおくつもりらしい様子でしたが、そんなことは知れ易いもので、半日経たないうちに、店中で知らないものはない有様でした。

五日目に、お品は家へ帰りました。平次へ一通り報告した上、父親の利助が、とかく身体が勝れ^{すぐ}ないので、それを一晩見てやるためでもあったのです。

全く三右衛門はこの二三日ことのほか快く、時々は廻らぬ舌で物さえ言うようになったので、この様子で三廻りもすれば、元の身体にはならなくとも、時々帳尻ぐらいは見られるようになるだろうというほどになりました。

その晩、主人の部屋に泊ったのは、相模女のお村^{むら}、始めのうち、大きい眼を開いて、看護^{みと}るつもりでしたが、次第に

猛烈に睡氣ねむけに襲ねられると、我にもあらず、健康な躰いびきをかい
寝込んでしまいました。

眼の覚めたのは翌る朝、窓を開けて、朝の光と空気を入れ
て見ると、主人の三右衛門、頸くびに赤い細紐を巻かれたまま、少
し乗り出し加減に、眼を剥むいて死んでいたのです。

「ワツ、た、助けてくんろツ」

お村は四よつん這ぼいになつて飛出しました。

恐ろしい不安を孕はらんだ、ハチ切れるような騒ぎが、猛火の
土の鍋を沸たぎらせるように、家の中を煮えくり返らせました。

「誰もここへ入るんじゃないぞ。お前は銭形の親分を呼んで
来い。お前は医者だツ」

支配人の禄兵衛が、たった一人でて、こ舞をしていると
間もなく、銭形の平次、子分のガラツ八をつれて飛んで来ま

した。

続いて、お品、町内の医者、町役人、家の中はただもうごつた返します。

「銭形の親分、申し訳がありません。たった一晩の油断で」
お品は面目なげに言うど、

「なアに、私はあつしこうなることを見通していたんだ。お品さんが一年泊っていりやア、三百六十六日目にこの家のや旦那がやられるよ」

「えッ」

「お品さんは証拠固めのとき役に立つんだ。安心していなさるがいい」

平次はお品を慰めておいて、変事のあつた部屋へ行きました。

七

「あッ、親分待っていました」

入口に頑張っていたのは、支配人の禄兵衛。

「番頭さん、大変なことになりましたね」

「どうしていいか、私には見当も付きませんが、とにかく、こへは、親分が見えるまで、誰も入れないつもりで頑張っていましたよ」

「それは有難い、早速見せて貰いましょうか」

平次は部屋の中へ入って行きました。中風に当たった半病人ですが、末期まつごの苦しみはさすがに物凄く、物馴れた平次も思

わず顔を反そむけます。死人の頸くびに巻いたのは、皮肉なことに、同じ部屋に居眠りしていたお村の赤い細紐で、蒲団ふとんの裾の方には、立派な縫つ、ぶしの紙入が一つ落ちております。

拾い上げて見ると、中には小粒が少々と、鼻紙だけ。

「この紙入は誰のでしょう」

平次がそれを持って部屋から出ると、

「あッ」

一目、番頭の禄兵衛が飛上がりました。雇人達は顔を見合せるばかり、口を利く者もありません。

「番頭さんが二三日前に失なくしなすった紙入というのは、それじゃございませんか」

とお品。

「え、そ、そうですよ。どうして一昨日おとといなくなつた私の紙入

が、そんな所に落ちていたんでしよう」

禄兵衛は齒の根も合いません。

「番頭さん、中を改めて下さい。中味に変わりはありませんか」と平次。

「……………」

禄兵衛は黙って紙入を取上げましたが、一通り中をあらた検めて、

「紙一枚、小粒一つ無くなつてはいません」

まじまじと頸を捻っております。

「番頭さん、心配には及びません。これはお前さんを罪に落そうとする術てですよ。幸いこの紙入が三日前になくなったことは、大勢の人が知っているようだし、それに——」

平次は部屋に入ると、主人の死体の頸に巻付いた赤い紐を解いて持って来ました。

「この紐で殺したようには見せかけているが、それも細工で、こんな細い紐で、人間一人殺せるわけはありません。——この通り」

平次は両手へ紐を絡んで引くと、小布を縫つて拵こしらえた赤い紐は何の苦もなく、灯心のようにフツと切れます。

「あッ」

驚き騒ぐ人々を尻目に、平次はもう一度主人の死体のところへ帰って行きました。

「御覧の通り、頸には、絞め殺した時の紐の跡が付いているが、それで見ると、刀の下げ緒か前掛の紐か、——とにかく、恐ろしく丈夫な一風編み方の変った真田紐だ」

「……………」

皆んなはもう一度顔を見合せました。

「番頭さん、濟みませんが、この部屋の隣は納戸になってい
るようだが、戸の隙間から変なものが見えますよ、拾つて来
て下さい」

番頭の禄兵衛は黙つて隣の納戸へ入りましたが、不気味そ
うに手へブラ下げて来たのは、焦茶色こげちやいろの丈夫な真田紐、いや
丈夫な真田紐の付いた手代の使う前掛です。

「あッ、世之次郎さんのだ」

誰かがとうとう口を滑らせました。

「八」

平次が一つ目くばせすると、ガラツ八は飛鳥のごとく、世
之次郎の背後うしろへ廻りました。

「野郎ツ、騒ぐな」

手頸に絡むのは、蛇のような捕縄。

「あッ、俺は、俺は何にも知らない」

世之次郎は、あまりのことに、驚くことも忘れたように、口を開いて茫然と立ち尽しました。

「紙入や赤い紐の細工は器用だが、さすがに叔父を殺した自分の前掛を持って行くほど胆が太くなかつたんだな、罰当りな奴だ」

妙な破目になつた禄兵衛は、主人筋の世之次郎へ、掴みかかりそうな様子を見せます。あまりのことに腹を据え兼ねたのでしよう。

それから十日目、石井一家の騒ぎに関係した者は全部八丁堀の吟味与力、笹野新三郎の役宅に呼出されました。

本当の調べは、町奉行でやることにはなっておりませんが、

おおおかせんのかみ

大岡越前守とか、遠山左衛門尉とかいう、後世までも聞えた

名奉行はともかく、大抵のお白洲しらすでは、筋書通りそれを繰り

返して口書くちがき拇印を取り、最後の言い渡しをするだけであつた

のです。

幕末の奉行などは自分で罪人を調べた者はほとんどなく、

与力も調べの出来るのは余程の傑物えらもので、大抵は岡つ引ひが引つ

叩ばたきながら調べ、お白洲は型だけのものであつたとさえ言わ

れております。

この日、笹野新三郎の前に呼出されたのは、石井の支配人

禄兵衛、三右衛門の甥世之次郎、これは伝馬町の仮牢から伴

れて来た縄付のまま、それに養い娘のお縫、勘当されていた

倅の三之助、下女のお村、それに銭形の平次と、八五郎のガ

ラツ八と、利助の娘のお品が加わりました。

「平次、お前の望み通り、ここへ皆んな集めたが、いったい何を訊こうというのだ」

笹野新三郎、何か期待するような調子で、微笑を浮べながら一同を見廻しました。

「へエ、この石井三右衛門一家の騒動は、ひどく手古摺てこずらせましたが、漸よく目鼻が付きました。順序を立てて申上げると明神裏でお町を殺したのは、あれは世之次郎ではございません」

「何？」

新三郎も少し予想外の様子です。

「あのととき世之次郎は、銭湯へ行ったような顔をして、町内の小唄の師匠のところへ行って、黄色い声を張り上げていたことは、大勢の証人があつてたしかでございます」

「フーム」

「それに、死骸の傍そばに落ちていた剃刀かみそりは、一度血を拭いて、改めて思い付いて捨てたもので、あれは、余程悪賢い奴のやったことでございます」

「……………」

「お縫でないことは、わざわざ自分の剃刀を捨てて来たので解ります。第一お縫は、お町と仲が悪かったそうで、背後うしろから肩へ手を掛けて、馴れ馴れしく剃刀を喉へ廻されるまで黙っているはずもなく、それに、下手人が女でないことは、八五郎が見て知っております。背の高い低いなどは、ほんのちよつとの間ならどうにでも誤魔化ごまかせます」

「なるほど」

「それから、主人の三右衛門を殺したのも、世之次郎ではご

「ございません」

「えッ」

平次の話の途方もなさに、新三郎始め、庭先に列ならんだ一同
思わず声を出しました。

「三日も前から、番頭の紙入を盗んで、それを証拠にしたとい
うのは、少し細工が過ぎます。紙入を盗めば騒がれるに決つ
ておりますから、そんなものは証拠になりません」

「……………」

「それほど細工の上手な世之次郎なら、何もわざわざ自分の
前掛で、叔父を絞め殺すようなことをするまでもないはずで
す。紐や縄はどこにでもあります。——その真田紐を、覗け
ば見えるような隣の部屋へ抛ほうり込んで、灯心のように弱い赤
い紐なんかを巻いておくのも細工が過ぎて本当らしくありま

せん」

「なるほど、理窟だな」

新三郎もすっかり引入れられました。

「私がお品さんをあの家へ入れておいたのは、下手人がお品さんに見せようと思つて、どんな細工をするか、それが知りたかつたのです」

「それだけ解つているなら、どうして無実の世之次郎を縛つて、ほんとう真実の下手人を逃がしておいたのだ」

笹野新三郎は、改めて平次に訊ねました。

「それは旦那、下手人に油断させて、尻尾を出させたかつたらでございませぬ。そうでもしなければ、私の腹の中で見当を付けているだけで一つも証拠というものがありません。世之次郎には気の毒ですが、叔父の敵討のために苦勞したと思つ

て、あきらめて貰うより外に仕方ありません」

「その証拠は何だ、下手人は誰だ」

「もう申上げるまでもないようです。あの顔を御覧下さい」

ハツと思うと、平次に指された支配人の禄兵衛は、立ち上がって庭口へ逃げようとしているのでした。

「逃げるのか、野郎ッ」

飛付いたガラツ八、力だけは二人前もあります。あツという間に禄兵衛を叩き伏せ、ひしひし犇々と縛り上げてしまいました。

「あの野郎です。店から現金で一万両も持出して、めかけ妾を二人も囲っております。三右衛門が丈夫になって、帳尻を見たらひとたまりもありません。それに、三右衛門が死んで、世之次郎を罪に落せば、総領の三之助は人別を抜かれておりますから、あとはお縫一人、あの大身代が支配人の自由になり

ます。朱い手筐の証文を、三之助へやるまいとしたのも、つまりは行く行く自分のものにするつもりだったのでございませぬ」

平次の説明は疑いを挟む余地もありません。

「そうか、太い奴があるものだ。すぐ口書を取って、奉行所へ引いて行け。皆の者、御苦勞であつた。別して世之次郎は気の毒だ。三之助が跡目相続済んだ上は、よく世話をしやるがいい」

笹野新三郎はこう言つて立上がりました。平次には別に褒め言葉もありませんが、平次にとって、その優しい眼が、雄弁に手柄を讃美しているので充分だつたでしょう。

底本：「銭形平次捕物控（八）お珊文身調べ」嶋中文庫、嶋中書店
2004（平成 16）年 12 月 20 日第 1 刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第七巻」中央公論社
1939（昭和 14）年 5 月 25 日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社
1932（昭和 7）年 11 月号

※副題は底本では、「朱塗の筐《はこ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。